

碁の手直り表

菊地寛

青空文庫

我々の倶楽部と云うものが、木挽町八丁目にある。築地の待合区域のはずれに在る。向う側は、待合である。三階建のヒヨロ／＼とした家である。二階三間三階二間である。家賃は三分して、社と自分と直木とで三分の一ずつ出すことになっていた。しかし、それは規定だけで、全部社が立替えて払っていた。

茲に直木は休んでいた。神奈川の富岡に家を立てたが、一万数千円を入れて出来上つても、一週間ばかり住んでいただけで、依然として倶楽部にいた。

直木は死前四日目意識不明になって、ベッドから起き上つて歩き出したとき、自分が「君寝ていなければダメじゃないか」と云

うと、「二階の方が昼間は涼しいから二階へ降りて寝ようと思つて」と云つた。倶楽部のことを云つていたのである。三階に、支那のじゆうたんなどを敷きつめて、モダンな机などを置いてあつたが、結局二階のカリンしたんの卓子一つしかない部屋で、床の間を後に、その卓子を前にして、いつも坐つていた。その背後には、権藤成郷氏が直木に贈つた七言絶句の詩がかかつていた。

烏兔慌忙憂不絶。一年更覚□年切

猶将纂述役心形。衰髮重添霜上雪

と云う文句であつた。

直木は、こゝで客も引見すれば、この卓子の上で原稿もかいた。机の上に、封を切つた手紙や請求書などが、のつかつていた。

去年の秋頃、倶楽部へは社の連中が、あまり行かなくなつた。

直木は、だまつているくせに、客好きなので、客が多い方が好きなので、執筆の邪魔になつても、お客が来た方がよかつたらしい。倶楽部へ行く人が、少くなつたが、自分は毎晩のように行つた。自分は、午前から午後三時頃まで、家において原稿をかいているのだが、去年の秋から新聞を二つ書かねばならなかつた。新聞を一つ書くにも二時間はかゝる、二つ書くと四時間以上はかゝる。家において、新聞を二つ書くと、雑誌の仕事は何にも出来ない。だから、これまでの規定以上、夜倶楽部へ行つて、新聞を一つ書くことにした。

だから、殆ど毎晩のように、倶楽部へ行つた。

原稿をかく前後には、直木と卓子と卓子を挟んで坐っていたが、何も話をしなかった。

何か訊けば、返事をする位である。文芸談や世間話などは一切したことがない。

手持ぶさただから、結局碁でも打つ外はなかった。

自分は、二十三歳の頃今の宮坂六段と一度打つたことがある。宮坂氏は、自分の棋力を初段に十一目だと鑑定してくれた。これはお世辞のない所で、正確だと思っている。その後、将棋ばかりやったので、碁の方はちつとも進歩していない。進歩していても、せいぜい三目位だろう。

しかし、四五年前、直木と打ったとき、自分は二目しか置かな

かった。だが、最近になって、直木は目に見えて進歩した。直木は、将棋も麻雀も下手だった。将棋などは、一寸気の利いた手を指すかと思うと、とんでもない悪手をさした。やりっぱなしの放漫な将棋である。碁もそうした所もあつたが、専心研究した甲斐あつて、この二三年三四目上達したらしい。去年の春頃打つと、四目置いて敵わない位であつた。

自分は、ぼんやりしている直木を慰めてやるつもりもあつて、直木とよく打った。だから直木とだけしか打たなかつた。その内に、そつと稽古をして、直木を互先で負かしてやろうかと云ういたずら気もあつたが、何分忙しいので、そのままに過ぎていた。

だから、四目で四番勝ち越して、三目になつたこともあるが、

すぐ四目に追い込まれた。

だが、去年の暮は勝ち越して、三目になっていた。今年になつて、ちゃんと手直り表を貼りつけて置いてから、勝敗をハッキリさせることにした。

そして、直木の部屋の壁に、次ぎのような表を貼りつけた。これは、一月二月の成績である。

文芸春秋棋院

直木

菊池 手直り表

一月十一日

三目

直木勝

同

一月二日

一月二十日

四目

一月二十九日

三目

二月八日

同

同

同

同

同

菊地勝

同

同

同

菊地勝

菊地勝

二月九日

菊地勝

日付のないのは、何日に打ったのか分らない。一晚にたいいて一局しか打たなかった。

直木は、正月になると（今年から碁は、誰にも負けな！）と、豪語した。また自分に不利な三目ではあるが、五番つづけざまに負けた。この表には、かいてないが、もう一番自分は、四目になるのを嫌って三目で打って負けたように記憶している。

だが、四目になると、最初の一番は直木が有利な形勢であったのを、最後まで打って見ると意外にも、僕が一目の勝であった。その後、直木の碁は非常に粗雑になつて、四番自分が連勝した。そして、三目になった。ところが三目でも自分が勝った。二月の

初旬に、彼は入院の準備を始めていた。そして、入院したら暫く会えないことを憂いてか、大阪にいる老父を訪ねて行った。帰つて来たのは、六日か七日である。

八日の晩に会ったとき、直木は非常に憔悴していた。いつもは（一番やろう）と云つて、自分が誘うのであるが、その日は直木の容子が、あまりに悪そうなので、自分が控えていると、直木の方が（一番やろうか）と云つた。

最初は、直木は中央に大模様を作つて、自分は策の施しようがない気がした。しかし、打っている内に、直木の石は、バラバラになつて、自分は大勝した。横に見ていた人が、直木をからかつた。自分は、直木の病勢が、わるいを知っていたから、勝つて

もちつともうれしくなかつたので、その人がからかわなければいいがと思つたが、その人はいつも直木と冗談半分に喧嘩をしている人なので、いつもの通り直木をひやかした。

「茲は、俺の家だ。茲へ来て、主人たる俺をからかう奴があるかと、云つて、怒つていた。むろん、冗談ではあつたが。」

その日、入院するつもりであつたらしいが遅くなつたのでよし。あくる日行つて見ると、直木はまだ、入院しないでいた。二月一日入院の筈が、大阪への旅行や何かで、のびのびになつたのである。

昨日、負かして却つて気持がわるかつたから、その日は自分の方から（一番やろう）と云つた。自分が誘えば、いやと云つたこ

とのない直木である。打ちかけたが、昨日よりもっと直木はよわかった。まるで、バラバラであつた。自分は、また大勝した。しかし、ちつとも愉快でなかつた。

もうこの頃は、脳膜炎の兆候があつたのである。八日の日に、大学へ診察を受けに行つたが、始終頭痛がすると云つていたそうである。

頭痛がするので、むしゃくしゃし、その気ばらしに自分と対局していたのであろうと思う。

九日の晩、自分と碁を打つてから、直木は自動車を呼んで、病院へ向つた。

自分は、脳膜炎になつている直木を、三日で二度負かしたわけ

である。

二月号で、村松梢風氏との棋力の優劣について、何か云つていたが、あれは両方で強がっているので、第三者たる川端君の説によれば、互角らしいとの事である。直木は、正氣のある間は、生きるつもりでいた。死前四日に、自分に対して

「長くかかるだろうが、生命に別条はないと思う。二三日物が、たべられると、どうにかなる」

と云つておしることを喰べていた。直木の病気が致命的であることを医者から聴き、もうあきらめていたが、自分は直木の希望をくじくような事は云わなかつた。そうした希望を持ったまま死なせるつもりでいた。遺言などをきいても心を乱すだけで、借金が

減るわけでなし、凡そ奇妙な遺族関係が、どうなるわけでもないと思つたからである。

しかし、意識が不明になつて見ると、正気の裡に、何か話して置けばよかつたと云う後悔も残つていた。

これは余談だが、お通夜の晩に、壁に貼つて置いた前記の直木との手直り表を、誰かが家を掃除するとき、はがしてあるのを発見した。

この手直り表には、直木が自分で書いた所もあり、自分と直木との交友のよい記念である。それを心なくはがされているのを見ると、自分はむやみに腹が立つて、社員や女中を怒鳴りつけて、探させた。幸いに、反古と一しよに庭へ捨ててあるのが発見され

た。
自分は、それをまた元の所へ貼りつけて置いてある。

青空文庫情報

底本：「日本の名随筆 別巻1・囲碁」作品社

1991（平成3）年3月25日第1刷発行

1992（平成4）年4月20日第5刷発行

底本の親本：「菊池寛文学全集 第六巻」文芸春秋新社

1960（昭和35）年6月

入力：渡邊つよし

校正：門田裕志

2001年7月26日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

碁の手直り表

菊地寛

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>